

新歴史の見える風景

陸軍三国飛行場（通称「芦原飛行場」）跡
坂井市三国町池上くあわら市舟津

戦時下に旧制中学校生徒と
県民の勤労奉仕で建設される



滑走路を利用して整備された県道152号波松芦原線

跡地は戦後に開拓され農地化された。
工事記念碑が建立されている▶



昭和18年、陸軍は坂井郡加戸村池上から芦原町舟津にかけての丘陵地帯に、飛行場建設を決め、4月18日、池上・舟津・二面の三区の区長に通知。21日には芦原温泉街の西南に在る福原劇場に関係者を集め、この地区一帯での飛行場建設を告知し、半強制的に買収承諾の捺印を迫り、翌日から測量および地上物件の調査を始めた。地目ごとに買収価格が定められ、5月に入ると交渉終了地から郷組（本社・大垣市、郷宗二代表）の請負で整地が始まった。一帯は松林や谷など起伏の激しい場所もあったが、作業は急ピッチで進められた。

芦原飛行場は、陸軍が国内で初めて重機を用いて飛行場整備の試験を行った場所で排土車や削土機も導入された。しかし、作業員は操作に不慣れで、保守技術も不足し、結果的には人力に追いつかなかった。試験は郷組と軍が中心で行なわれ、早期に断念されたものと思われる。

5月27日には演習用に500mの短い滑走路を造成し、九七式戦闘機による離着陸試験が行われた。6月には飛行場の総設計が完了し、陸軍航空本部経理部三国工事本部が設置され、8月以降、本格的な工事が開始された。芦原小学校には飛行場開設に伴う部隊の宿所が設置され、作業員の入浴用に温泉施設も提供された。

ここからは、労力奉仕による人海戦術で、夜間のみならず、土木工事には不適切な北陸の冬期にも作業が続けられた。地元では、鍬やシャベル、手押車、トロツコなどの道具を使い、工事を進めたと伝えられているが、重機の使用に関する記録は一切残されていない。

19年春には、南北延長1800m、幅300mの主滑走路が完成し、引き続きこれと東西に斜交する副滑走路建設が始まったが、戦局が急迫し、米軍



による本土空襲が予想されるなか中断され、防護施設や運用施設の建設が優先となり、掩体壕などが整備された。これらの作業には、福井中学、三国中学をはじめとして多数の生徒が動員され、周辺地域や職域、官衛等の団体も勤労報国隊を編成して従事した。

19年12月の東南海地震後、戦闘機約40機が退避し、20年4月には浜松から百式重爆撃機10機が進出し、東尋坊沖での洋上飛行訓練では「跳飛弾爆撃訓練」も行われた。

しかし、20年7月の福井空襲では、生徒や県民が献身的な労力作業に従事したにもかかわらず、芦原飛行場からは迎撃のために1機も出動することなく、市内は敵機に蹂躪されることとなった。そして8月15日の終戦を迎え、飛行場も廃止となった。

（文 奥山秀範）



▲戦後間もない頃の空撮には飛行場跡が見て取れる
（昭和23年、国土地理院）



開拓記念碑の一角に「陸軍飛行場跡」を示す石碑が建立されている▶